

Close up

だて

シリーズ ふるさと探訪⑤

「伊達の火防」

伊達市に住む私たちが知っていたいそうではない歴史や裏話を生涯学習課文化財係がシリーズでお届けします。



消防本部（昭和20年代）

伊 達市の消防組織の始まりは、消防組として発足した明治20年までさかのぼります。

当時、旅館業を営んでいた皆川庄吉が初代の組頭になり、組員30人を率いていました。この当時はまだ私設消防組で、装備は竜吐ポンプ1台のみという体制でした。明治28年に公設消防組の設立が義務づけられてから、組員の増強や装備の充実が図られていきます。当時は火災が多く、明治40年には村役場や郵便局など14戸が消失。昭和2年には錦町から山下町にかけて115戸を全焼、そして昭和7年にも錦町界限32戸が全焼するなど大火が続きました。度重なる大火に対応するため近代的装備の必要性が高まり、昭和8年にはポンプ自動車「ダッチ号」と「ハンドソ号」が増備され、活躍しました。



気門別川での消防演習（昭和32年）

写真（上）の建物は当時の消防本部です。中央奥に、遠くを見渡せる火の見櫓が立っているのがわかります。当時は高層建築物がなかったたので、この程度の高さでも十分に町内を見渡すことができました。この場所は現在のひまわり保育所（旭町）の道路を挟んだ海側です。その後、消防本部は昭和36年に館山公園の麓に移設され、平成15年に現在の松ヶ枝町の場所に移設されました。

市には手動の「腕用ポンプ」が文化財として保存されています。このポンプはすでに役目を終え放水はできませんが、当時の火防の歴史を後世に伝えています。火災からまちを守った消防組の人たちがいたからこそ、今日のまの姿があるのです。



腕用ポンプ

表紙のはなし



8月28日に行われた「2016消防・防災フェア」。会場にはさまざまな体験・実験コーナーがあり、子どもたちは楽しそうに見学したり消防車に乗せてもらったりして、まちを守る消防士の仕事に興味津々でした。普段はできないような貴重な経験に、大人も子どもも目を輝かせていました。

楽画記

■2016だての食のフェスティバルにお邪魔しました。全道各地からさまざまなメニューが集結し、会場内にはおいしい香りが…。普段なかなか食べられないものがたくさんあり、私も取材後に、いくつかのメニューを買って帰り、早速食べ比べ。とてもおいしかったのですが、食べた分をしっかりと消費しなければ…。(た)

■本格的な秋がやってきました。秋といえば「○○の秋」。食・芸術・スポーツと、市内では多くのイベントが行われます。行くのを忘れて！とならないよう、気になるイベントは、広報紙やホームページ、フェイスブックなどでチェックしてくださいね。会場で広報のカメラを見つけたときは、笑顔でポーズをお願いします。(や)

■この号が皆さんのお手元に届く頃には、涼しさを寒さと感じているようになっていでしょうか。今年は蒸し暑く、寝苦しい時期が長かったような。その割にはとても健康に夏を乗り切りました。さて、これから「食欲の秋」がやって参ります。今年もさまざまな秋の恵みに感謝しつつ、冬に向けて蓄えが増えるばかりでございます。(と)

発行・編集 伊達市企画財政部企画課
 〒0142-23-3331 内線298-299
 電話 0142-23-4414
 郵便 kounou@city.date.hokkaido.jp
 〒052-0024 北海道伊達市鹿島町20番地1

とじて保存しましょう